

291  
12  
3

報  
100

氏生丸

日本國盡

東山道

三



291









05874113

瓜生氏日本國盡巻三

東山道十三國

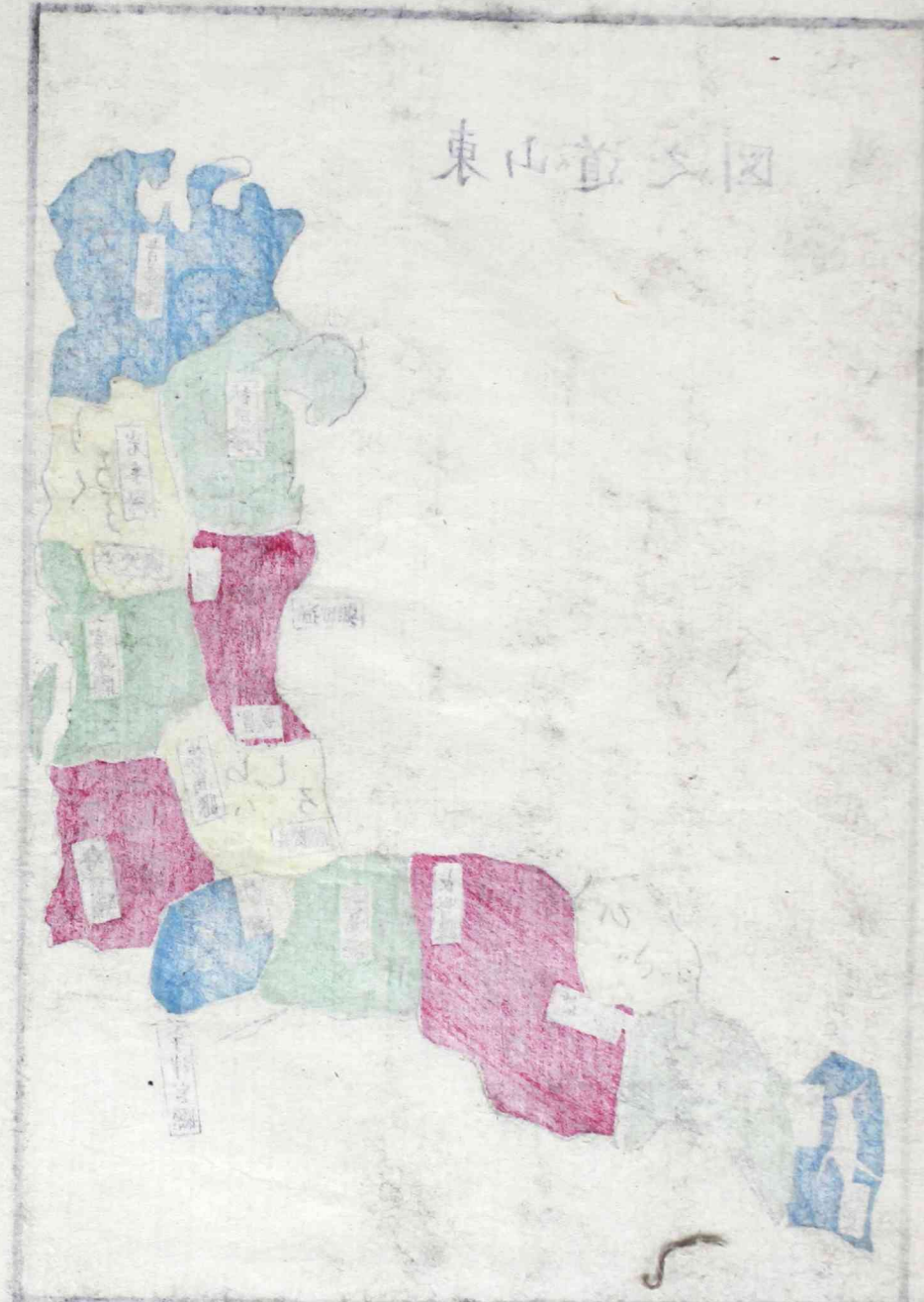
日本内地の山道より五畿

の東より起る南と水

東海と北陸道の二道

を狭みたる地中を

東山道三國





險阻の山脈に連り就  
 の脊中ふさへん似たり其  
 屋に末らるる方とん浪風  
 恙ま海をさる受け如  
 向く長く延び小海原と  
 一水に迫門を隔てお望む

先づ第一と近江と海を  
 一國の地をわつ北西の  
 三方を越前若狹を渡り  
 丹波山城伊賀伊勢の  
 六國より包まむと東を  
 美濃とお隣り四方と



生の中より琵琶の形は琵琶  
琵琶の湖南を狭く小唐  
横中七里於此豎の柱よ  
り至る者二十四里四方は  
山々川の由みあつたり  
茂らるるみく琉場一環の

水の面より見たまき音も  
海内無収支那の西湖ん  
いそらるるまきくさるる  
らめやを執もは湖水いそ  
むく一富士のてまきの湧出  
しとき同く出来し



そのともや狭き南は其の  
もま延びく流きそ又  
末も山城より宇治川  
の流もなるまじく流り  
湖中の名ぬのそ中ふ竹  
生ゆまは是れ赤景り

天皇十二年一夜り湧出

山を中ふま

東と西り地を分ち西な

る方より西江東に東は

よく名勝の教も東西を

え教へ奉るり味あり



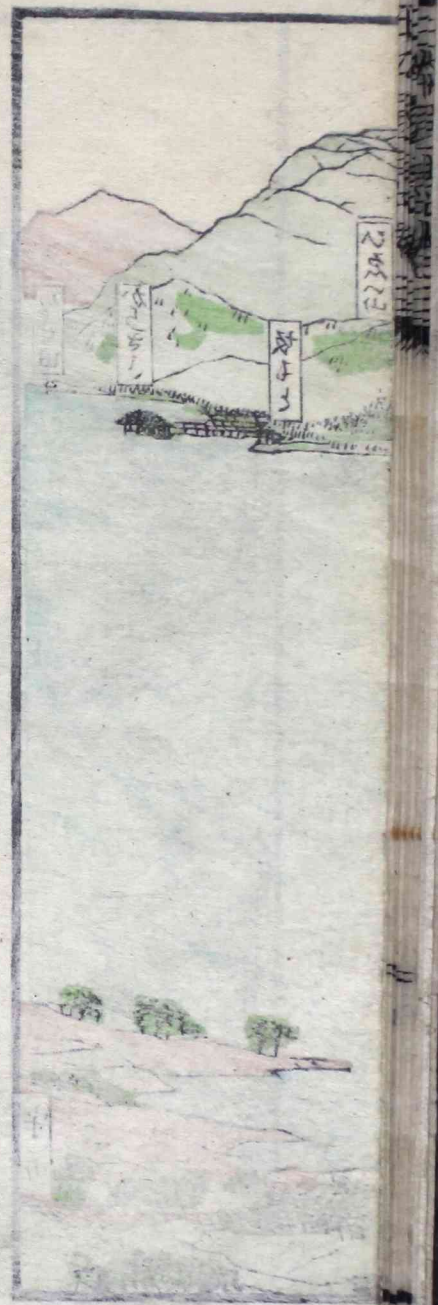
西より京と脊合部  
の富士の比叡部山滋賀部  
花山滋賀の浦より  
天智天皇此都の跡を想  
えりて京へ入る人  
往来の道に結習たみ

な君が世お逢坂の昔は  
のちたつて大津の宿の  
ふきさしと船なりあは  
入船や出舟の絶えぬ中  
よま滋賀の船屋をきき  
あやむ十二郡の内西と









百千舟波の粟津の雲霞  
 夕日さそと満るの景色を  
 瀬多しの長橋  
 ながの舟を比良の舟  
 白雲紅まはれ舟を満る

百千舟波の粟津の雲霞

六



了。おつる堅田此かやま金也。  
 春こゑえんまうりさ小夜更ろけく。  
 淋しみ— さまさるる産崎うきの松まつ  
 らあめ雨あめのあめさあめまあめとあめなるあめ色いろさあめく  
 東ひがしまあるあ山やまおあほあくあ。まあさあ川がはおあ  
 きあ持あがあ中なか耳みみ。山やまのやまさあまあきあくあ

伊い吹ぶのい次つぎりいさあ山やま金かね磨すり  
 嶽たけ南みなみりい水すい晶しゆ釋しゃく加かのい嶽たけ  
 川がは少すくるあ聖せい所しよ愛あい智ち善ぜん利り川がは也なり  
 善ぜん利りのぜん川がはのぜん湖うみへぜん入いとぜんもぜん口くちをぜん産い  
 根ねもねくね。湖うみ水みづりね産いむねおねふね  
 海うみのうみ地ち大おほ上うへ野ののの庭にわありうみくうみ。



西北高陽一郡と東北江  
 の愛智川死水の五郡を管  
 轄す。二縣合をて一國と  
 人口五十三万余。氣候風土  
 も自ら。夏多雨。冬少雪。  
 あり北を必り法らる。

平ら。冬多雪。夏少雨。風土  
 一。産根以南。多を扱。あべ。  
 山の中。のよき。所。地。極。  
 め。潤澤。多。五穀。一切。  
 実。水。産。物。多。日。本。  
 の。豊。の。あ。る。と。日。本。



才四番目のつゞく多く其  
 民似い化玉より稼きたるを見  
 ゆめまきごと。善を露く遊を  
 包む身持と子に人おへ  
 其豊々のある産物の中下  
 穡もく貴きつら。米穀艾

硯布砥石石灰長濱糸竹  
 樂陶器及び茶器の表物  
 沙瀑布朽木塗物牧帳鍋  
 釜源五布鮎や雨の魚田上  
 氷魚子勢田硯  
 東山道に才二番より濃も



海なき平地ひらちとく小こと東ひがしの  
 山やま深くふかく惠めぐみ奈な山さん鷹たか巢すく杉しん  
 槍やぶ山やま越こ前まへ花はな弾だまと信しん濃のう  
 地ちと界さかいを接せつしと西にし見み  
 ます。近あつち江えと隣となりと山やまのりて。  
 伊い勢せ地ちと近ちかきと多おほ度ど山やまの  
 伊い勢せ地ちと近ちかきと多おほ度ど山やまの

ちと音ねと千せんと元げんと養やう老らう元げんの  
 湖うみに御ご方ほうに音ね我われとさるさると南みなみの  
 ひと里さとと打うち井いき。尾お張はりを  
 矢や河がと界さかいして原はら  
 水みづ田たつとおとく。木き曾そより  
 来きる本もと名な川がわと花はな弾だまと



と此川合流一洲股川也  
大垣川于派を分ち國内  
に。蛛の網よりあほ志はけ  
充ち日たりたる抄の末  
尾張の界を徑めりて  
伊勢の海へも注ぎ入る所

股川の上流は厚見郡の  
原より岐阜と名けり南  
の一國一園を爰轄と抄に  
人口を抄ふを五十六萬  
六千余山林田畠豊なり  
く。五穀系綿よく生ず



山手を空をみるがらして  
 南より自然中へ正なり國風  
 負して人をもくまへ  
 多のぬち地より出れ  
 美濃紙生れ外に作るお  
 糸綿絹也産玉より実の

糸物也産日本陶器是也  
 寺の産物なり  
 舟三花彈えし山國と海  
 部一風の地は八つ西小越  
 前加賀越中。南より美濃小  
 東より信濃とより又けく



四方山。其鞍。硫黄。大鎗。が嶺。  
 錫杖。双六。白木。岳山。を圍む。其  
 中。し。外。より。見。ま。さ。を。矢。張。  
 山。所謂。龍。の。脊。中。より。て。音。  
 も。さ。ま。ま。の。土地。拔。く。一。南。美。  
 濃。地。へ。流。ま。出。る。久。し。流。も。

北。の。方。越。中。富。山。の。海。へ。入。る。  
 神通。中。田。の。二。川。に。水。の。源。  
 國。中。より。蔓。り。た。る。中。央。  
 子。名。を。高。山。と。し。て。る。地。に。  
 國。子。似。合。谷。ぬ。怒。り。集。の。市。  
 國。此。人。口。二。万。余。も。と。谷。間。



の土地たつたての寒暑もつと  
 不<sup>ふ</sup>心<sup>しん</sup>く<sup>く</sup>人氣<sup>じんき</sup>も都<sup>みやこ</sup>々<sup>々</sup>愚<sup>ぐ</sup>  
 直<sup>ちゆう</sup>あるま<sup>ま</sup>其<sup>その</sup>官<sup>くわん</sup>轄<sup>くわつ</sup>も隣<sup>りん</sup>玉<sup>ぎよく</sup>の  
 信<sup>しん</sup>濃<sup>のう</sup>の筑<sup>つく</sup>摩<sup>ま</sup>縣<sup>けん</sup>廳<sup>りやう</sup>もて五<sup>ご</sup>穀<sup>こく</sup>  
 熟<sup>じゆく</sup>ら<sup>ら</sup>に<sup>に</sup>産<sup>さん</sup>物<sup>ぶつ</sup>も材<sup>ざい</sup>木<sup>もく</sup>多<sup>た</sup>く  
 其<sup>その</sup>外<sup>がわ</sup>も銀<sup>ぎん</sup>銅<sup>どう</sup>綿<sup>めん</sup>燭<sup>しやく</sup>硝<sup>しょう</sup>石<sup>せき</sup>

彈<sup>だん</sup>吹<sup>ふ</sup>及<sup>およ</sup>び<sup>び</sup>ひ<sup>ひ</sup>死<sup>し</sup>了<sup>りやう</sup>油<sup>あぶら</sup>  
 牙<sup>が</sup>四<sup>し</sup>信<sup>しん</sup>濃<sup>のう</sup>ら<sup>ら</sup>飛<sup>ひ</sup>彈<sup>だん</sup>もりも  
 亦<sup>また</sup>月<sup>げつ</sup>又<sup>また</sup>々<sup>々</sup>々<sup>々</sup>一<sup>いつ</sup>大<sup>だい</sup>國<sup>こく</sup>龍<sup>りゆう</sup>乃<sup>なり</sup>  
 脊<sup>せ</sup>骨<sup>こつ</sup>の正<sup>せい</sup>生<sup>せい</sup>の申<sup>しん</sup>日<sup>にち</sup>本<sup>ほん</sup>一<sup>いつ</sup>の山<sup>さん</sup>  
 國<sup>こく</sup>も々<sup>々</sup>々<sup>々</sup>四<sup>し</sup>方<sup>ほう</sup>を<sup>を</sup>包<sup>つつ</sup>む<sup>む</sup>十<sup>じゅう</sup>ヶ<sup>ヶ</sup>國<sup>こく</sup>  
 北<sup>きた</sup>々<sup>々</sup>越<sup>こ</sup>へ<sup>へ</sup>々<sup>々</sup>其<sup>その</sup>西<sup>せい</sup>も<sup>も</sup>械<sup>けい</sup>



中<sup>ちゆう</sup>に<sup>ひ</sup>浮<sup>ぶ</sup>り<sup>り</sup>美<sup>み</sup>濃<sup>のう</sup>の<sup>こく</sup>國<sup>こく</sup>南<sup>なん</sup>  
と<sup>と</sup>冬<sup>ふゆ</sup>の<sup>い</sup>河<sup>が</sup>を<sup>と</sup>遠<sup>とほ</sup>江<sup>え</sup>駿<sup>すま</sup>河<sup>が</sup>を<sup>と</sup>と  
く<sup>く</sup>り<sup>り</sup>地<sup>ち</sup>を<sup>せ</sup>接<sup>せ</sup>く<sup>く</sup>東<sup>ひがし</sup>の<sup>かた</sup>方<sup>かた</sup>を  
甲<sup>か</sup>斐<sup>ひ</sup>武<sup>ぶ</sup>藏<sup>ざう</sup>之<sup>の</sup>を<sup>く</sup>加<sup>か</sup>へ<sup>く</sup>上<sup>うへ</sup>  
野<sup>の</sup>を<sup>と</sup>其<sup>その</sup>境<sup>かた</sup>を<sup>と</sup>み<sup>な</sup>山<sup>さん</sup>  
と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>孰<sup>たゞ</sup>を<sup>と</sup>と<sup>と</sup>嶮<sup>あや</sup>の<sup>と</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>也<sup>や</sup>

あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>一<sup>い</sup>た<sup>た</sup>び<sup>び</sup>境<sup>かた</sup>を<sup>と</sup>入<sup>い</sup>る<sup>る</sup>  
と<sup>と</sup>壺<sup>こ</sup>中<sup>ちゆう</sup>の<sup>てん</sup>天<sup>てん</sup>地<sup>ち</sup>も<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>  
く<sup>く</sup>國<sup>こく</sup>内<sup>ない</sup>往<sup>わう</sup>來<sup>らい</sup>の<sup>たい</sup>大<sup>たい</sup>道<sup>だう</sup>も<sup>も</sup>本<sup>ほん</sup>  
曾<sup>そ</sup>路<sup>ろ</sup>を<sup>し</sup>始<sup>は</sup>り<sup>り</sup>棧<sup>けん</sup>橋<sup>きやう</sup>を<sup>か</sup>掛<sup>か</sup>  
渡<sup>わ</sup>り<sup>り</sup>た<sup>た</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>京<sup>きやう</sup>を<sup>と</sup>其<sup>その</sup>志<sup>し</sup>  
ひ<sup>ひ</sup>や<sup>や</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>や<sup>や</sup>と<sup>と</sup>其<sup>その</sup>



山々大槪々横嶽三階  
 野能了山奥石冲嶽下駒  
 嶽素倉大嶽常念嶽  
 穂高島帽子也屏風嶽  
 飯黒鼻茶所嶽大日嶽  
 や姨控山飯盛山小和田山

釜澤銀八ヶ嶽大倉三倉  
 白峰山烟絶之きぬ浅間  
 嶽夏夏し雪あたる戸隠の  
 山中郷音くも流のさるすは  
 山々あり落ち降る水々  
 次あり集りて西



向少き本曾の川南ふる  
 下流川少く流るる姫川  
 や北流又北流屏川も流  
 摩の二水お人々信濃川  
 の二水もあましく城後流  
 新浮の海へ向く流るる今

本曾と信濃の二川を類す  
 きある大河あり坂東を郎  
 とお並び之を稱して本  
 邦の三大河とせん申すあり  
 南へ流るる天龍の北流源  
 を祿訪の湖周匝三里の湖



冬水もらぬる冬の日は  
 人の性来の便より月より  
 名所より更新山々の姨捨  
 小田毎の月駒を相原宿  
 月や温泉の名所も数おほ  
 一國都をば人只七十四

万の千余北よりえりて  
 ほど陰氣の深きそよよ  
 人の多事煩も健より日本一  
 此より北風なるまきく  
 の公官轄を西と東より二分  
 して東の方此六郡を屏



と筑摩乃二川の出合より  
里に長野縣西北四郡と  
彈一圓を摩乃水と相本  
筑摩縣を歴ありて金  
之を支配せり。其の産  
物と諸材木蕎麥は麻綿也

小坂原白芋烟草より糸紬  
五ノ上野是もまた信濃  
隣る山國と海あり  
其の地は十番形と鴨足  
葉はくく南を武蔵北の  
方越後岩代に地を隣る



東に方も下總と下野に  
 地を界し山嶺し  
 土地をく坂東太郎乃利  
 根川の水源國中に充滿す  
 山に二を数くなるも少少は  
 榛名南にあり妙義白狐也

薬師山嶽あり赤城西乃  
 方碓氷峠も本曾海乃信  
 濃の國に界し三國峠  
 と名をりたる山を其の數  
 三つあるも其が山脈も一  
 なるも中にも城後も南



と北岩代と此國界あり  
ある、當國や。岩代下野三  
國に界ありて。山として。  
西方なる方も信濃地と越後  
の國と。當國の界を分つ所  
なり。此も當國の人。四

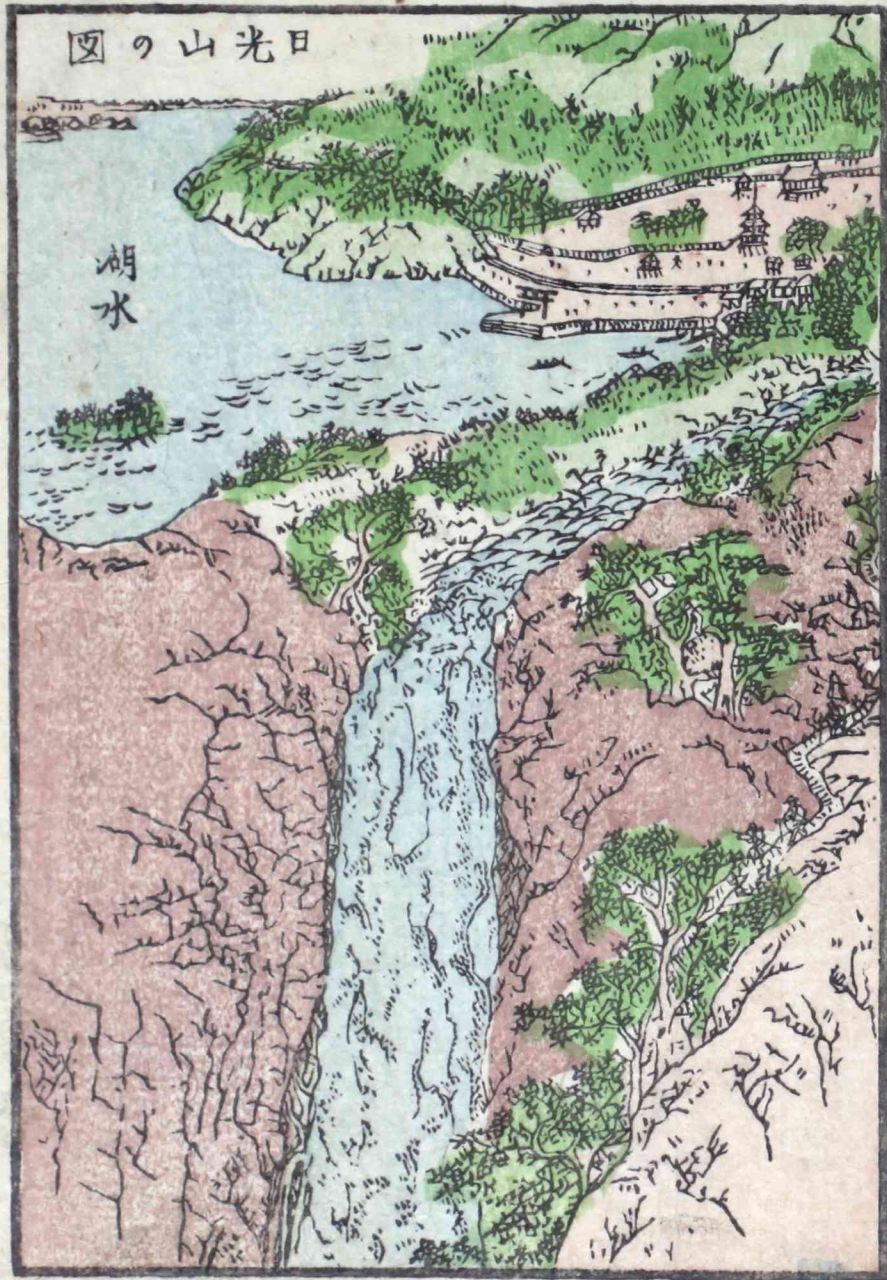
十九万七千人。山と谷を  
了。此も此と。一。暖氣の土  
地。素の未。お。く  
は。底。と。吞。飼。乃。業。の。世。小  
務。と。種。は。る。亦。や。絹。布  
類。盛。し。仕。出。ま。せ。た。質。



上州物とて稱えらるる。その  
外は産物も佐那の白苧  
も布涼其風俗も信州と  
云ふ方々もとて云々。た  
鴨足の葉の根りあつた  
る土地よりけく右手の三

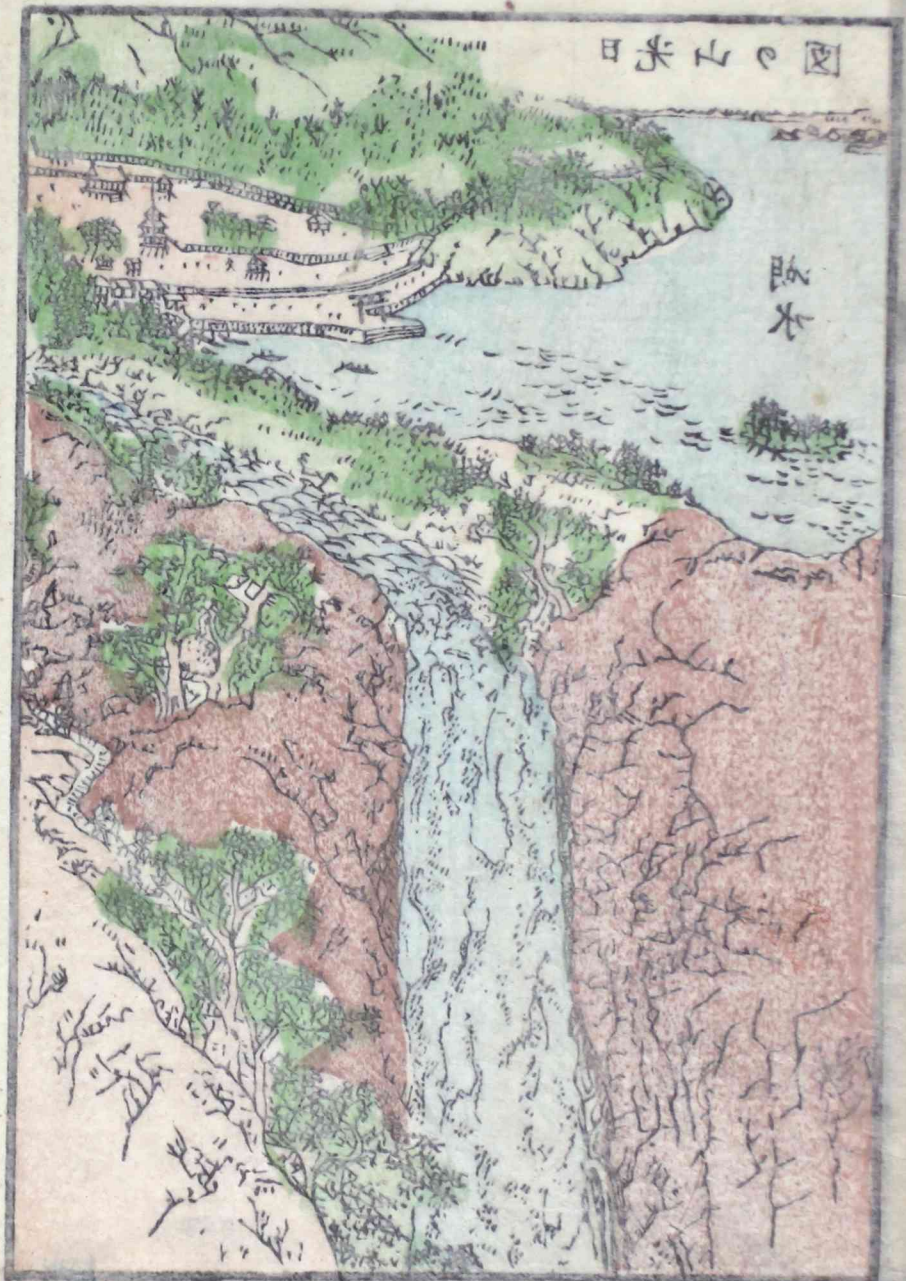
郡邑樂り新田山田を  
管轄する下野の都賀  
の郡乃栃木縣其外余乃  
郡ナも國は中央より南  
葉乃左より高崎のとき  
如ふ所の所より云々。





郡馬縣廳の支配あり。  
 六ノ下野ナニ海あり  
 西ノ上野界山  
 おほく黒旗高の原奈須  
 山嶽北ノ崎立たり。  
 乾の方少く日光山寺あり





峯に於ての中よ流るる裏見  
 少水きるまを跳立く落る  
 霧降の流る下流を布  
 引川三里四方の湖に眺む  
 吾奴の中禅寺流れて来  
 大や川國内原を亦おろく

日本國書紀三



那須なすの林麓はやしより那須野なすの原はら  
 國くには生なまの川がわより小標こめ茅ちや原が西にし  
 より河がたりとくさふ原はら東ひがしの  
 方かたより土地ちち開ひらき諸もろ水すい敷しき派は  
 小原おんより南みなみより向むかふ下した總そう  
 のみ不利ふり根ね川がわより流ながれはこみ

東ひがしより行ゆく多おほ常じょう陸りくなる  
 那須なす川がわよりなる海うみより入いる  
 一國いっくに人口じんこう四十萬しよばん那須なす原はらより  
 土つち厚あつく草木そうもく盛さかき生なま繁はげ  
 王おう民みん俗ぞく清せいきやうなるを  
 内うちより濁にごれをとり交まじへ相あひつ



ひしむ鄙びたり。其管轄を  
 東より分れて東より宇都  
 宮縣東京以下の都華北  
 地西より上野三郡を和へ  
 く。杉木の支配あり。銅漆  
 絹麻紙日光より其地と

昔是は山の子産物ぞ。

其中七を磐城の國西邊

の方より阿武隈川其水

其岩代より流るる

當國を界を分ち中間

其又岩代を通り過き其



至く遂にやまた毒ひこの  
 地のゆふ八重山能百を流す  
 けき液瀬川と落あふく  
 東へ向く海へ入る是を  
 陸前と云ふ界あり液瀬川  
 の河より高く峙つ蔵王

岳君が恵をそあ忘のふらさ  
 侍あそ温泉と記  
 出る竈崎也國能南乃一國  
 下野者侍より界して  
 山々おほく立あひ白坂  
 へへく白川の冥も昔乃



関の跡本邦関の音初とらや  
 東より都へ海岸より磯  
 うら浪の音こころはなむ  
 川の敷お母き中より一とら  
 南手へ離れきこく行くも常  
 陸なる久慈の河水は水工

北由國十三郡の内南の端は  
 白河の郡は内乃西の手にあ  
 たりて交り岩代の福島縣  
 の支配あり北は端なる三郡  
 と宇多の内より中村より  
 水の音も陸前の宮城縣



廳管轄一。中子砂り  
十郡。乃ち當國本縣の  
磐石前縣の支配あり。さき  
國土産物品々。白河。縮。緬  
磐城。雲丹。白石。紙子。り。三  
喜。約。牛。馬。い。物。厚。

抄。是より後。此磐石  
城。岩代。陸前。と。又。陸中。と。  
陸奥。と。五穀。豊饒。地味。厚  
き。陸奥。と。名。け。く。廣。大。の  
一。ヶ。國。と。い。ふ。を。考。す  
戊辰年。子。ま。め。く。ち。る



五ヶ國は其のつとて今より  
あるはありしに其のなき人の  
數より今又以前乃一國  
たしし其の時其の負を掲  
げし大畧を知らしめんと  
其のさるるなりたるまゝ

二百六十萬二千ありける  
人々其の風俗の相違  
は偏屈頑固そのまゝ好む  
地形よりよからしく失  
多少の差ありとせむ先  
づ南より右のぐと常陸



小續きし海濱ゆえ外の  
地よりいそぐ緩く人氣も常  
陸ふや似たり其餘も次第  
りなつてゆくおふ入る所と  
雪深くさ地も良き  
と鄙屈少く言詞も卑劣

舌も鼻も

多き

入る岩代山國も海

國は北の十二西も城後

り地を降るり通る

え山の上六十里城又さす小



十里残存なるを其の數に  
 少くまゝあつて其の嶺  
 には想もするも南の  
 上と下とされたるを  
 山嶺も其のまゝの  
 へりてみえて國の内  
 地を有する

少く。のけくみく山嶺  
 大熊布了安達山信夫を  
 子和尚山は山脈の東西  
 なる平地おほくして東  
 五郡を磐石城なる白  
 河を八幡宮



の支配あり地於東ふお  
開き中をみく阿武隈川  
信夫原也安達なる野中  
の清水影清く温湯  
須川二本お壽きつふ  
福島のほきまふ町を叙

原をきつるをたふ所を  
予より西に若松縣  
猪苗代の所也只見の川  
鶴沼川の水は合ふ  
とあるを越後地へ流す  
てゆくも會津川水の系



万代山峯より大なる  
 礬少く塩の白泉の温多  
 湯の効有るのみを汲  
 りて食用の塩を製  
 して民を養ふを天津  
 御神に祈りて又お松

少く温泉水あり土地を  
 体よくして雪深きこと  
 甚しく其産物を福  
 島絹信夫摺絹人參也  
 漆蠟燭椀と盆  
 さくく九番目を陸前を



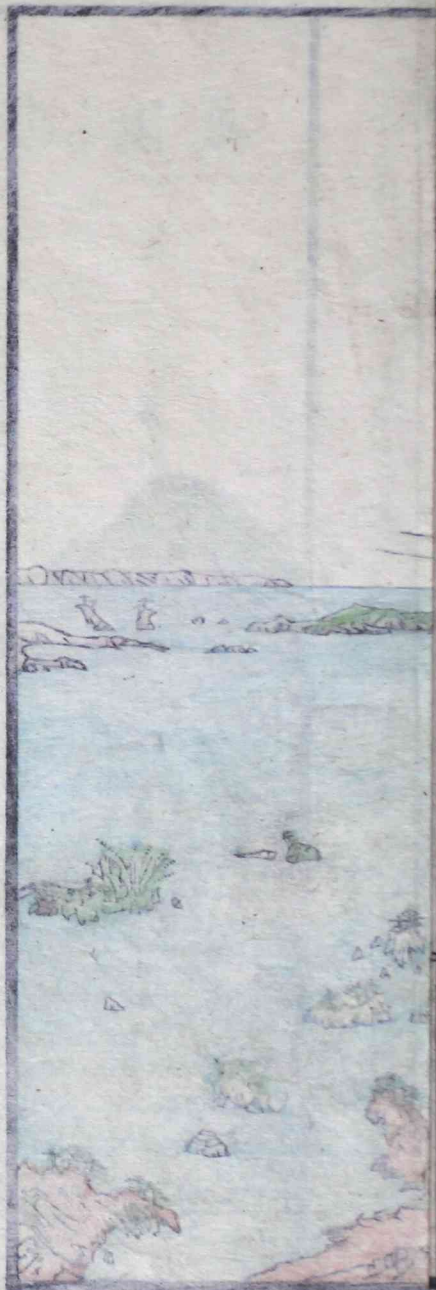
全國都く山おほく西を  
 羽前小界して山脉陸續  
 引つゞきさあらし就の腰  
 骨少く中をえ高き尾川  
 岳南の方を阿武隈川  
 磐城岩代國界を東西二面

右平海牡鹿柳生の二郡  
 海千つぎ出し大岬南小  
 曲り海灣とありし地方の  
 濱手少を大崎小嶼数百  
 千何事せん古ね枝を垂  
 き曲洲環浦奇々怪々天









さききこむ日本三景の第一  
 とと持賞しけき金谷山  
 その沖小堀り立る島  
 の山持た外名所回跡  
 相厚き中よんらと記  
 る小鶴池や躑躅が雲天



平寶字六年おんふ建てたる  
壺石いふみ研い多賀たが乃な古城こぼらう  
の跡あとあり川かまろ名取なとり廣ひろ  
瀬川せ少すく河か下か落合おちあ今いまより  
海うみを流ながる江合川えあひが廣瀬ひろせ  
の川かを南みなみより奥おくの都みやこに

青葉山あさ仙せん基もとより小野おの  
集あつの市いち宮城みやぎの敷のきの所ところあり  
まろく江合川えあひがより南みなみの方かた九  
郡ぐんを隣となりの般石城はんせきじょうたる北きた乃  
四郡しぐんを管轄くわんかつかつし川かより小  
の五郡ごぐんを北きた乃隣となり五陸ごりく



中<sup>ちゆう</sup>に水<sup>みづ</sup>澤<sup>さわ</sup>の支配<sup>しはい</sup>を是<sup>こゝ</sup>に  
仙<sup>せん</sup>臺<sup>たい</sup>細<sup>こ</sup>紙<sup>し</sup>布<sup>ふ</sup>干<sup>かん</sup>飯<sup>いひ</sup>奉<sup>ほう</sup>書<sup>しょ</sup>  
其<sup>その</sup>外<sup>ほか</sup>紙<sup>し</sup>のるゐ<sup>るゐ</sup>金<sup>きん</sup>海<sup>かい</sup>鼠<sup>ねず</sup>埋<sup>うめ</sup>  
木<sup>ぎ</sup>於<sup>お</sup>諸<sup>しよ</sup>材<sup>ざい</sup>是<sup>こゝ</sup>に造<sup>つく</sup>る<sup>る</sup>の産<sup>さん</sup>  
物<sup>ぶつ</sup>也<sup>なり</sup>。

十<sup>じゅう</sup>子<sup>し</sup>陸<sup>りく</sup>中<sup>ちゆう</sup>一<sup>いつ</sup>六<sup>りく</sup>きもすゝる

山<sup>さん</sup>お月<sup>つき</sup>き國<sup>くに</sup>あして内<sup>うち</sup>少<sup>すく</sup>大<sup>だい</sup>  
弱<sup>じやく</sup>形<sup>かたち</sup>月<sup>つき</sup>の山<sup>さん</sup>仙<sup>せん</sup>人<sup>じん</sup>跡<sup>あと</sup>茶<sup>ちや</sup>所<sup>しよ</sup>  
峯<sup>かみ</sup>早<sup>はや</sup>池<sup>いけ</sup>神<sup>かみ</sup>山<sup>さん</sup>姫<sup>ひめ</sup>外<sup>ぐわい</sup>山<sup>さん</sup>小<sup>せう</sup>  
の方<sup>かた</sup>より方<sup>かた</sup>へ<sup>へ</sup>のけ中<sup>ちゆう</sup>を  
舟<sup>ふね</sup>北<sup>きた</sup>上<sup>かみ</sup>川<sup>がは</sup>陸<sup>りく</sup>前<sup>ぜん</sup>山<sup>さん</sup>小<sup>せう</sup>  
海<sup>うみ</sup>へ<sup>へ</sup>北<sup>きた</sup>上<sup>かみ</sup>川<sup>がは</sup>水<sup>みづ</sup>源<sup>げん</sup>を



山<sup>た</sup>の北<sup>きた</sup>の端<sup>はた</sup>の北<sup>きた</sup>上<sup>うへ</sup>山<sup>やま</sup>  
 國<sup>くに</sup>の西<sup>にし</sup>を<sup>を</sup>陸<sup>りく</sup>前<sup>ぜん</sup>より  
 續<sup>つづ</sup>き<sup>き</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>山<sup>やま</sup>の<sup>の</sup>脈<sup>みやく</sup>峯<sup>ほう</sup>  
 の<sup>の</sup>數<sup>かず</sup>を<sup>を</sup>引<sup>ひ</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>ある<sup>ある</sup>風<sup>かぜ</sup>に  
 激<sup>げき</sup>して<sup>して</sup>大<sup>おほ</sup>濤<sup>たう</sup>の<sup>の</sup>躍<sup>うよく</sup>を<sup>を</sup>物<sup>もの</sup>  
 が<sup>が</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>其<sup>その</sup>數<sup>かず</sup>あ<sup>あ</sup>げ<sup>げ</sup>て

彈<sup>たま</sup>され<sup>れ</sup>ど<sup>ど</sup>羽<sup>う</sup>後<sup>ご</sup>の<sup>の</sup>國<sup>くに</sup>と<sup>と</sup>此<sup>こゝ</sup>  
 界<sup>かい</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>高<sup>たう</sup>き<sup>き</sup>い<sup>い</sup>西<sup>せい</sup>木<sup>ぼく</sup>  
 駒<sup>こま</sup>山<sup>さん</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>山<sup>さん</sup>猪<sup>しゆ</sup>兵<sup>へい</sup>冲<sup>ちゆう</sup>約<sup>やく</sup>岳<sup>たつ</sup>を<sup>を</sup>  
 東<sup>ひがし</sup>よ<sup>よ</sup>を<sup>を</sup>岩<sup>いわ</sup>就<sup>しゆ</sup>鳥<sup>とり</sup>山<sup>さん</sup>奥<sup>おく</sup>乃<sup>の</sup>富<sup>ふ</sup>士<sup>し</sup>  
 と<sup>と</sup>こ<sup>こ</sup>名<sup>な</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>北<sup>きた</sup>を<sup>を</sup>陸<sup>りく</sup>奥<sup>おく</sup>  
 界<sup>かい</sup>と<sup>と</sup>西<sup>せい</sup>端<sup>はた</sup>突<sup>つ</sup>出<sup>で</sup>中<sup>ちゆう</sup>凹<sup>あふ</sup>み



角つのの形かたちよりささも似にたり。唐たうの  
 角つのは一本いっぴんを鹿角郡かかくぐんと名な  
 をつけり。山やまは数かずと立たち並なみび。  
 金銀銅鉄きんぎんどうてつ博はく月山つきやま芦あし柄へ花はな  
 部べ八や畠はたけ山やま羽はね後ごり流ながる能のう  
 代しろの川がはは水みづとくたに河がはり其その

管轄くわんかつし物もののつゞ。羽はね後ごの秋あき  
 田では物もの産うむ。林はやしは余あまも南みなみ  
 水みづは二分にぶんして水みづ六郡ろくぐんを  
 盛岡もりおかの岩手いわて縣けん乃すなはち支し解かいす。  
 南みなみは方かたの三郡さんぐんと陸前りくぜんの  
 國くに五郡ごぐんをとし管轄くわんかつする。



尚志の磐井郡に水澤  
 縣とて東に一面を海  
 の我みそ川おほし北に川  
 乃河の水より高きむ川を  
 衣川伊ふき和加川豊澤  
 川豊澤川に水よりおよ

数ヶ所の温泉あり。みそ  
 夫々名を得たり。其を  
 此中より名馬を  
 いそを土地より尾駁の牧  
 や奥の牧若野の牧を  
 となくし。牧より出づ











東の岬より時つる火煙ふ  
き出せ焼山まきなすも  
火山の二つあり川も越北津  
輕川温湯を青森より東  
濱をの方より安佐虫あり  
南に山ふ碓圓又なるたも

名湯なり。さきくは國は産  
物。津輕丹古也津輕石  
珀舍利石津輕石。  
東山道の舟十二第十三  
羽前お後き一ヶ國を是  
まする。出羽と唱けて一國の



地<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>そ<sup>そ</sup>あり<sup>あり</sup>し<sup>し</sup>を<sup>を</sup>辰<sup>ちん</sup>年<sup>ねん</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
二<sup>ふた</sup>つ<sup>つ</sup>一<sup>いつ</sup>折<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>南<sup>なん</sup>手<sup>て</sup>北<sup>きた</sup>四<sup>よ</sup>郡<sup>ぐん</sup>ハ  
羽<sup>う</sup>前<sup>ぜん</sup>北<sup>きた</sup>の<sup>の</sup>方<sup>かた</sup>八<sup>はち</sup>ヶ<sup>が</sup>郡<sup>ぐん</sup>を<sup>を</sup>我<sup>われ</sup>  
羽<sup>う</sup>後<sup>ご</sup>も<sup>も</sup>つ<sup>つ</sup>あ<sup>あ</sup>二<sup>に</sup>玉<sup>ぎよく</sup>都<sup>と</sup>を<sup>を</sup>我<sup>われ</sup>  
人<sup>ひと</sup>口<sup>くち</sup>八<sup>はち</sup>十<sup>じゅう</sup>七<sup>しち</sup>万<sup>まん</sup>百<sup>ひゃく</sup>人<sup>にん</sup>余<sup>よ</sup>其<sup>その</sup>  
風<sup>ふう</sup>候<sup>こう</sup>を<sup>を</sup>三<sup>さん</sup>陸<sup>りく</sup>を<sup>を</sup>似<sup>に</sup>宗<sup>そう</sup>家<sup>け</sup>如<sup>ごと</sup>

智<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>あり<sup>あり</sup>徒<sup>た</sup>け<sup>け</sup>た<sup>た</sup>り<sup>り</sup>土<sup>つち</sup>厚<sup>あつ</sup>  
く<sup>く</sup>一<sup>いつ</sup>と<sup>と</sup>教<sup>きょう</sup>實<sup>じつ</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>今<sup>いま</sup>も<sup>も</sup>昔<sup>むかし</sup>  
も<sup>も</sup>雪<sup>ゆき</sup>海<sup>うみ</sup>一<sup>いつ</sup>羽<sup>う</sup>前<sup>ぜん</sup>の<sup>の</sup>  
國<sup>くに</sup>を<sup>を</sup>岩<sup>いわ</sup>代<sup>しろ</sup>の<sup>の</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>あり<sup>あり</sup>あ<sup>あ</sup>た<sup>た</sup>り<sup>り</sup>て  
東<sup>ひがし</sup>の<sup>の</sup>方<sup>かた</sup>山<sup>さん</sup>脈<sup>みやく</sup>を<sup>を</sup>三<sup>さん</sup>陸<sup>りく</sup>前<sup>ぜん</sup>  
と<sup>と</sup>脊<sup>せ</sup>中<sup>ちゆう</sup>を<sup>を</sup>合<sup>あ</sup>せ<sup>せ</sup>地<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>羽<sup>う</sup>後<sup>ご</sup>



西より續り海をうけ西  
 南より誠後より内地まで  
 なる山おほく積りて高  
 く峰ゆる月山羽黒湯  
 殿山川を志げく蔓りし  
 中より名あるい小田黒川寒

川江川やをぼろけ川昇る  
 りさへや降るてふ美たなき  
 里の夜る最上川中川の落  
 ちてつりなりい坂田川  
 川より羽後と能界より持  
 の川より酒田縣外原ありて



南の海を以て田河一郡と  
羽後乃能海を支配するを  
其川上の最上郡村山郡と  
置給に内をかく合す  
管轄するを山形縣南の  
隅の置賜の縣の方米

澤より立つ置給たる置賜  
の縣に支配を仰ぐなり  
羽後を以て山國と  
く。東を陸中山つぎ山  
を森吉郡長門郡保昌  
波高屋山殊り高き



鳥海山中より大平川の  
 方地を陸奥より相隣る  
 矢立一森山池の基國は  
 形も長方形に東より西  
 南より北の海海平  
 風浪高き北の海海平

さし出づ男麻の根もと  
 塩やの地狭みく。輕糸きこと  
 めたる半島。向ふ地方の  
 船川の口を緩より一棧乃。  
 海水つりて井の中い潮を  
 たもる。即河岸よりい



高坂高津水島。島々を  
 風本山に中より挟む。新  
 山や山又山の數しき。川  
 能代小吉川國に生る中  
 戸島川戸島川の川  
 久保田より一市を秋田

縣廳のあり所。其に  
 の名を稱する。飲海を  
 玉に七郡をく陸中  
 鹿角郡を加へる。さ  
 高の國に産物。錫銀鉛  
 蠟。漆。秋田。紫蘇。紫  
 麻。油。の



紙や麻の皮青竹臭橙紅  
の花米澤袖秋回織方り

瓜生氏日本國畫卷三終

名山閣新發兌書目

東京芝大神官前

和泉屋吉兵衛

手習草紙

全四冊

啟蒙知恵之環

全三冊

氏 日本國畫

菱潭書

繪入

全八冊

皇國官名誌

菱潭書

全一冊

小學教科則中

行書日本國畫

菱潭書

府縣入  
圖入

全一冊



真書 日本國盡 菱潭書 府縣 郡名 圖入 全一冊

童蒙脩身帖 菱潭書 全二冊

文明子寶習字章 菱潭書 頭書繪入 世界國名入 全一冊

同 二篇 菱潭書 頭書繪入 日本國名入 全一冊

同 三篇 菱潭書 皇國の歴史 全二冊

增訂萬國航海全圖 折本 掛物 全一折

合衆國政治小學 瓜生先生譯 全八冊

貨幣中外比較考改正 深間内基譯 全一冊

啓蒙脩身錄 深間内基譯 全二冊

米政撮要 全五冊

醫語類聚 奥山虎章譯 全一冊

慈父の教 全二冊

西畫初步 全一冊

萬國地理小學 繪入 全三冊



草木六部耕種法

前後五冊

合本全十冊

農政本論

全八冊

蠶桑圖解

全一冊

製茶圖解

全一冊

本朝辭言

英語對覽

全三冊

6484  
横濱市立図書館  
農政本論

瓜生三寅著

第三大區三小區  
四番町壹番地

明治五年壬申十月新雕

東京芝大神宮前

名山閣

和泉屋吉兵衛



横浜国立大学附属図書館



05874113